

報告番	※	第
-	-	

主 論 文 の 要 旨

論文題目 バングラデシュ村落社会におけるコミュニティの動態
(Dynamics of rural community in Bangladesh)

氏 名 杉江 あい

論 文 内 容 の 要 旨

従来、バングラデシュの村落は、地縁や血縁に基づく強固なコミュニティを持たない個人主義的な社会として描かれてきた。それに対して近年では、従来の村落像を批判的に検討し、住民が意識するウチ／ソトの境界の動態や、住民の社会生活において重要な意味や役割を持つ村落社会単位を見出す研究が蓄積されている。しかし、これらの近年の研究も従来のものと同様に、マイノリティであるヒンドゥーや、血統や特定の職能との結びつきにより、代々他のムスリムから通婚等の社会的交流を拒否されているムスリムのカースト的集団については十分な検討をせず、これらの人々を除くムスリムのみに関心を集中させてきた。バングラデシュの村落社会ではムスリムとヒンドゥーが隣り合って暮らしており、ムスリムも同質的な一枚岩を構成しているわけではない。それにもかかわらず、従来研究においてヒンドゥーやムスリムのカースト的集団がほとんど扱われてこなかったのは、国民国家を基本的な単位とする地域研究の枠組みと、一義的に宗教によって社会を分け、カーストをヒンドゥーに固有な社会制度とする従来の南アジア社会論の枠組みに基づき、国家のマジョリティであるムスリム多数の村落がバングラデシュの典型的な村として優先的に研究され、その中でヒンドゥーやムスリムのカースト的集団は研究の対象から除外されてきたことによる。しかし、近年の南アジア社会論では、宗教によって社会を分け、それぞれの社会構造を解明しようとする従来の研究の枠組みから脱却することが大きな課題とされており、宗教やカーストを所与の差異としない在地の人々の思想や実践、動態的な社会関係が明らかにされている。そこで、本研究は、従来のムスリムを中心としたバングラデシュ村落社会に対する偏った理解を是正するため、マイノリティであるヒンドゥーや、ムスリムのカースト的集団への視点を組み込み、多様な構成主体とその相互作用から村落社会を捉えなおすこと

を目的とした。住民が共同的な活動を行う上で形成する組織や集団，また個人間の関係や相互行為から，バングラデシュ村落社会のコミュニティの同時代的な動態とともに，長期的な変化を明らかにすることにより，住民の社会生活において宗教やカーストが持つ意味とその変化について検討した。

具体的には，従来研究において住民が自律的に形成し，選択的に成員となって紛争解決や宗教的な活動を共同する社会単位とされてきたショマージに着目し，これがどのような宗教的，社会的な差異や地理的な領域に基づいて形成されるのかを検討した。その中で，宗教やカーストを所与の差異とするのではなく，文脈依存的に固有の差異や序列を示すジャーティという在地の実態概念によって，どのように集団に対する差異化や序列化がなされているのかを考察した。ジャーティという言葉は，通説的には特定の職能を持ち，序列化された内婚集団であるカーストの現地語とされているが，少なくともベンガルでは，それよりもはるかに広範な文化的含蓄を持ち，人々が日常生活で形成する多様な集団範疇とされている。本研究の対象地域においても，ヒンドゥーのカーストやムスリムのカースト的集団に対してジャーティという言葉が使用されていたが，その言葉は文脈依存的に多様な差異を指して使われており，カーストとは等置できないものであった。また，ショマージの形成のみに焦点を当てるのではなく，個人間の関係や相互行為，なかでも従来研究においても重視されてきた互助や富の分配に着目し，これらを明らかにすることから，ショマージ，ジャーティ，および村落社会単位の持つ社会的，文化的な意味を考察した。

本研究の対象地域は，ヒンドゥー，ムスリム，およびムスリムのカースト的集団が定住する，首都ダッカから北西約 80 km ほどに位置するタンガイル県の数か村である。ムスリムのカースト的集団は，冠婚葬祭における楽器演奏を職能とし，シャナイダルというジャーティ名を持つ（以下では便宜的に，他のムスリムと区別するためシャナイダルと記す）。筆者は，この対象地域において 2011 年から 2015 年まで合計約 1 年 10 カ月間のフィールドワークを行い，参与観察と住民への半／非構造化インタビュー，2 つの村を主とする全戸調査を実施した。また，これらの一次資料に加え，1918 年における村内の土地保有状況等を示す地籍調査台帳・地籍図，行政によって公式に取り扱われた訴訟の記録簿等の二次資料の分析を行った。

20 世紀初頭，対象地域では宗教やジャーティに基づくすみ分けが見られ，異なる宗教の住民間の社会的，物理的距離は大きなものであった。高位ジャーティのヒンドゥーは卓越した政治経済的地位を独占しており，紛争解決や村落の秩序維持はジャーティのヒエラルキーに基づいてなされていた。パキスタン建国，バングラデシュ独立を経て高位ジャーティのヒンドゥーが流出し，近隣村等のムスリムが流入したことによって，ヒンドゥーとムスリムの間のすみ分けは不明瞭になり，両者間の日常的な交流や互助は増加した。しかし，両者間の非対称な関係やマイノリティで

あるヒンドゥーに対する両義的な扱いは、社会生活の様々な場面において顕在化していた。

ヒンドゥーの間では、高位ジャーティのヒンドゥーの流出と低位ジャーティのヒンドゥーの経済、教育水準の向上によって、従前の政治経済的な支配関係がなくなり、儀礼的な観念に基づくヒエラルキーや特定のジャーティに対する序列づけは、その宗教的な正統性を否定されていた。しかし、そのなかでもジャーティの差異は言明され、異なるジャーティ間の通婚は制限され続けていたが、従来、ジャーティの序列関係の大枠をなすヴァルナに基づいて形成されていたショーマージは、機能に応じて形成される多層性と流動性を持つようになり、大きな規模の宗教行事は、村のヒンドゥー全体が1つのショーマージを形成して共同的に行われるようになった。

他方で、シャナイダルとムスリムの間の通婚は代々、同村および近隣村ではなされておらず、シャナイダルの分離居住は継続していた。シャナイダルはその出自や通婚関係、実際の職業というより、その居住空間に基づいて同定されており、シャナイダルとムスリムとの間の実体的な境界は厳密なものではなかったが、シャナイダルに対する観念的な序列化や差異化は村落社会において維持ないし強化されていた。シャナイダルの経済、教育水準は一様に低く、他の住民に対して政治経済的に従属的な立場にあった。住民がシャナイダルについて言及する際に用いるジャーティという言葉は、序列というより、「ヒンドゥー」か「ムスリム」という二分法的な思考に基づく宗教的な差異、また宗教的な善悪を基準とした「よい」／「よくない」という差異を含意していた。しかし、シャナイダルの職能を示す言葉自体が蔑みを含意することから、シャナイダルに対する差異化ないし序列づけは、その職能に付与されたスティグマによっていたと考えられる。シャナイダルの宗教的な側面による差異は、パキスタン建国、バングラデシュ独立の過程で村落社会における人口的、景観的なイスラーム化が進行し、またムスリムの間でも、よりイスラーム的な実践を志向する傾向が強まる中で、重要性を増してきた。宗教的な差異を含意したジャーティによってシャナイダルを差異化することは、シャナイダルに対する通婚や同じショーマージへの所属の拒否、居住地からの空間的な締め出しを正当化し、またこれらの行為はシャナイダルの政治経済的な立場の弱さによって可能になっていた。

宗教やジャーティによる差異やそれに基づいて形成されるショーマージは、社会関係や相互行為を枠づける基準として一定の影響力を持っていた。しかし、個人のレベルでは異なる宗教やジャーティの住民との関係は多様であり、宗教やジャーティの違いによってあらゆる社会関係や相互行為が規定されるわけではなかった。村落社会における空間の共有は、不可避的に対面的な関係や相互行為を生成させ、紛争解決や互助、富の分配はショーマージや村を越えて行われており、社会生活の諸場面において、宗教やジャーティの差異は無化ないしは後景化されていた。

村落社会における属人的な信仰は、宗教やジャーティにかかわらず、1つの信仰において多様な住民を結び付け、共同する空間を生成していた。また、日常的に互助がなされるのは、主に血縁、地縁的紐帯に基づく個人間の関係によっており、空間の共有に基づく隣人同士の対面的な関係や人間としての共同的なつながりによって、宗教やジャーティの差異は後景化され、互助がなされていることが強調されていた。ショーマージが自他の線引きにとって重要な排他的な社会単位である一方で、富の分配や互助がショーマージ内に限定されず、個人レベルでなされていたことは、ショーマージ内における分配の機会や互助が乏しいシャナイダルが、ショーマージ外の住民から援助や施しを得ることを可能にしていた。これらの援助や施しは、宗教やジャーティの差異に基づいて行われるのではなく、貧者や社会的な弱者に対する慈悲、救済という宗教的、道徳的な通念による共同性のもとに成立していた。バングラデシュの村落社会は、宗教やジャーティの同一性に基づく共同性と、それに基づかない共同性とが動的に展開する社会空間として捉えられる。